平成30年７月豪雨からの復旧・復興

1. はじめに

岡山県は、南は瀬戸内海をはさんで四国に、北は山陰地方に、また東は兵庫県、西は広島県に接しており、昔から中四国地方の交通の要衝として発展してきました。県内には吉井川、高梁川、旭川の３つの一級河川が流れ、常に豊かな水をたたえています。

県南部は穏やかな瀬戸内海とそこに浮かぶ多くの島々が美しい景観を形成し、県北部には緑豊かな山々に囲まれた温泉もあり、海・山のレジャーを満喫することができます。

また、岡山県は「晴れの国」と呼ばれ、降水量１㎜未満の日数が全国１位と、晴れの日が多く、温暖な気候と豊かな自然に恵まれ、四季を通しておいしいものが楽しめます。白桃やマスカット、ピオーネなど「くだもの王国」としても全国的に有名ですが、他にも寿司飯用のお米として有名なコシヒカリのルーツである朝日米や４大酒米の一つ雄町など米づくりも盛んで、瀬戸内海では魚介類の種類も量も豊富です。

このように普段は、温暖で過ごしやすい本県でありますが、平成30年７月の豪雨の際には、堤防決壊や越水、内水氾濫などの甚大な浸水被害、土砂災害が引き起こされ、これまでにほとんど経験したことのない規模の災害となりました。

2. 平成30年７月豪雨の概要

平成30年７月豪雨では、７月５日から７日の３日間の降水量は県内多くの地点で300㎜を超え、６日の夜には県内24市町村に大雨特別警報が発表されました。

このうち本県の３大水系の一つである高梁川水系では７月５日の昼前から７日朝まで雨が降り続き、高梁川本川、支川の小田川の各観測所で、氾濫危険水位を超過するとともに、観測史上最高水位を更新する水位となりました。

このため小田川ならびにその支川である末政川、高馬川および真谷川（以下「３支川」という。）では、高梁川本川の背水の影響による越水で堤防が決壊し、倉敷市真備町において、浸水面積約1,200ha、最大浸水深５m超の大規模な浸水が発生した結果、50名を超える方が亡くなるとともに、地区の約半数を超える約4,600棟以上の家屋の浸水被害など甚大な被害が発生しました。

写真－１　末政川の堤防決壊箇所

3. 真備緊急治水対策プロジェクト

このような被害を受け、小田川の管理者である国、３支川の管理者の県および倉敷市は、平成

岡山県知事　伊原木（いばらぎ）　隆太（りゅうた）

31年２月３日に、防災・減災のための「ハード」「ソフト」が一体となった「真備緊急治水対策プロジェクト」を、国・県・倉敷市が連携して取り組む方針として発表し、水防災意識社会の再構築に向けた取り組みを加速し進めることとしました。

4. 河川激甚災害対策特別緊急事業

県管理の３支川は、河川激甚災害対策特別緊急事業（激特事業）に採択されましたが、本県においては、平成10年災以来、実に20年ぶりの申請・採択となりました。

事業内容としては、小田川の水位を低下させる小田川合流点付替え事業（国）や重点的な堤防整備、河道掘削などを小田川本川（国）と３支川（県）で実施しています。

このうち県が整備を行う３支川では、堤防の嵩上げや断面拡大などを、事業費約89億円、事業期間を平成30年度から令和５年度までの６年間として実施しています。

なお、事業を円滑に実施する上で、地域住民の方とコミュニケーションを図ることは重要であり、これまでに地元説明会を多数開催したところですが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により対面による説明会の開催が困難となってからは、地元ケーブルテレビを活用し、事業の進捗状況を地元関係者に伝えるなど「見える化」に努めています。

３支川の進捗状況は、令和３年10月末時点では、用地取得が約94％、工事が77％となっています。また、末政川では約２年間の全面通行止めを行い、橋梁の架け替え工事を実施しているところであり、激特事業の早期完成、ひいては、倉敷市真備町の一日も早い復旧・復興を目指し、鋭意工事を進めています。

写真－２　高馬川の施工状況

5. おわりに

本県では、復旧・復興の取り組みを着実に進め、より災害に強く元気な岡山の実現を目指しています。さらに、新型コロナウイルス感染症による危機を乗り越えるべく、懸命に対応しているところです。社会経済活動の本格的な回復はこれからとなりますが、感染症を契機とした社会の変化をさらなる発展につなげたいと考えています。

本年２月には本県において、一般社団法人全日本建設技術協会の建設技術講習会が岡山市において開催されます。同講習会の現場研修では「真備緊急治水対策プロジェクト」のうち、国が強力に推進している「小田川合流点付替え事業」もご覧いただけますので、多数の皆さまのご来県をお待しております。